

平成詩漫步

8. 「崩壊に抗う詩魂——「岡田幸文」という墓碑銘」

中村剛彦

前回、「『平成詩』を貫くもの」と題して、崩壊直前のソ連を風刺したジノビエフの『酔いどれロシア』から詩を引用しつつ、そのアルコール依存症患者で溢れかえるソ連社会への風刺が、まるで現在の日本を含めた西側諸国への風刺とまったく変わらないことに気づき、「平成詩」とはいわば「崩壊の詩」であり、そして「自殺の詩」と呼んでよいとやや強引に論を閉じた。

ではその『酔いどれロシア』はどのようにその崩壊を終えるのか。最後から2番目の詩はこうである。

レクイエム
鎮魂歌

短い地上の生を終えたとき
わたしの墓場で歌ってくれ。
諸君、こうした頌歌しょうかのひとふしを、
永遠とわに地上に留まることの無理を、
生きとし生ける者の有為ういてんべん転変を。
だが嘆くばかりが能ではない。
君は死者となりて永遠とわを得る、
諸君、そう言ってロシア式に
叫び大声で泣きわめいてくれ
深い森の獣のように吠えてくれ。
して、さらなる歌を続けてくれ。
人生たった一度じゃないか、
愁い煩うことなく生きよ、
一瞬のきらめきをなぜ嘆く、
くたばれば永遠とわの死者になると。

家に戻っては笑みをうかべ、
注いでくれるはすべて呑み
たがいに腹うちあけて話し、
殴りあって顔を地に染め、
残れる生命の限りを生きよ。
そして必ず想いだしてくれ、
人生をなつかしみうやまうことを、
生は一瞬にして、死は永遠なるを。

この詩の横には「供養」と題した風刺画が置かれている。13名の酔っ払いたちがどんちゃん騒ぎをしてレクイエムを歌っているのである。中には嘔吐している者がいて、その背中にはフォークが刺さっている……。

次に最後の詩を引く。

弔辞

わたしがくたばったら、
新聞の広告などやめて、
美辞麗句も捨て去って、
トイレの汚れた壁に、
弔辞を捧げてくれ、
彼は宇宙を飛ばず、運河も掘らなかった、
ただのロシアの酔いどれにすぎなかった、
みごとに卑猥な罵り言葉で地上を這い、
ツマミもなしにウォッカを呑みほし、
諸君と同じくわれらの空をいぶした。
演説をぶたず、でたらめな本も書かなかった。

それでも最後に、こうつけたしてくれ、
ここに彼は永眠する、されば世界は、
酔いどれの^{ガロフカ}一瓶分だけ低くなったと。

最終行の「ガロフカ」は訳者注によれば、ロシアで瓶を数える単位で、頭の指示語でもあるという。この詩には「無名酔いどれの墓」と題された風刺画が添えられている。クレムリン宮殿を背に、巨大な瓶の形をした無記名の巨大な墓が建てられ、両脇に二人の酔いどれが立っている。この「無名酔いどれの墓」は、クレムリンのそばのアレクサンドル公園にある「無名戦士の墓」をもじったものと注にある。

この最後の二つの詩と風刺画をセットで鑑賞すると、ジノビエフはこれからも墓碑銘のない「無名酔いどれの墓」は幾つも建てられ、世界の崩壊には終わりが無いのだと述べているようだ。ソ連という国家が崩壊しても、その後にも世界の崩壊はつづくのである。なんとも救いのない結末ではあるが、リアリストの眼をもって描かれるこうした風刺は、見掛け倒しの癒しの詩よりもずっと私たちの魂を揺さぶる。実際あれから30年経った現在も、クレムリンは国家権力の象徴として威光を放っている。

そのソビエト連邦が完全に崩壊したのは1991年12月25日であるが、その2年前の1989年11月9日にすでに東西冷戦の象徴であるベルリンの壁は崩壊している。「平成」元年である。実はこの年、日本では一冊のささやかな詩集が刊行された。それは日本がその後「崩壊」の道を辿る「平成」時代に現代詩に一大革命を起こしたひとりの編集者の詩集である。その詩集から一篇引く。

ジプシーバスに乗って一度こんな詩を書きたかった

岡田幸文

喋りたくないことは喋りたくない
やりたくないことはやりたくない
サヨナラを言いたくなるのはこんなときだ
ジプシーバスがやってきたのは
午前二時三十分の新宿二丁目の路上を歩いていたとき

僕はサヨナラを言ってもよいと思った

「行先は？」

ときくと

運転手は

「遠くまで」

と答えるので

僕は何も考えないでとび乗った

すると ジャニスの歌がきこえてきたんだ

freedom's just another word for nothing left to lose

このフレーズは日本語におきかえたくないな

と思いながらきいていると

「ジャニスの声をきいていると

彼女がどんなふうにしたかわかるんだ」

と運転手が話しかけてくる

そうだ

声をバカにしてはいけない

声だけでその人がわかることもあるんだ

そうだ そして

ちょっと話をただけで

その人がたとえば天皇制を支持しているなっということがわかってしまうときもあるんだ

それは直感ってやつだけど

直感をバカにしてはいけない

そして僕は天皇主義者とはつきあいたくない

「むかし ジャニスをききながら女の子とタバスコをたっぷりかけたスパゲティの大盛をビールを呑み
ながら食べたことがあるな」

僕は運転手に話しかけた

お天気がとてもよくて

僕は女の子にキスすることも忘れて

ジャニスの話ばかりしていた

「ぼくもきみも

出会うという

覚悟がなかった

きみには……きみのわけがあろう

ぼくは出会いが好きたったのだ！^{*}」

ジプシーといえば、何となく

ガルシア・ロルカのことを思い出すけれど

ロルカの歌を僕に教えてくれたのは

十九歳の長い髪の女の子の手紙だった

ジプシーバスよ

遠くまで運んでおくれ

僕は遠くまで行きたいんだ

いまの僕は何もすることができない

だから 何でもできるんだ

明け方に安物のウイスキーのストレートを一杯のどに流しこんで

ベッドの上に倒れこむこともできるし

ネクタイをしめてオフィスにでかけることもできる

ジプシーバスがやってきたのは

サヨナラを言いたくなるこんなとき

サヨナラを言うために

サヨナラを言われるために

*ロルカ「出会い」（長谷川四郎訳）より

岡田幸文第二詩集『アフター ダンス』（ミッドナイト・プレス、1989）から引いた。

「昭和」が終わり「平成」がはじまった 1989 年にこの詩集が刊行されたことの意味は、「令和」を生きる私にとって深刻な問題を投げかけてくる。なぜなら岡田幸文という存在が、これまで何度か引いた青春期の詩友金杉剛とともに、私の人生の中心にいるからだ。

岡田幸文について、以下に略歴を挙げる。

1950 年（昭和二十五年）7 月 29 日、京都下鴨神社そばの母の実家で生まれる。

1977 年 3 月 東京大学文学部印度哲学科卒業。在学中より、詩学社に出入りする。

1986 年 11 月 1 日 山本かずこと結婚。

1983 年—1988 年 「詩学」編集長。

1988 年 3 月 22 日 詩の出版社ミッドナイト・プレスを創立。

1989 年—1998 年「詩の新聞 midnight press（全 21 号）」を発行。

1998 年—2006 年「詩の雑誌 midnight press（全 31 号）」を発行。

2012 年—2015 年「midnight press WEB（全 13 号）」を発行。

詩集

『あなたと肩をならべて』（いちご舎、1981 年 12 月 8 日）

『アフターダンス after dance』（ミッドナイト・プレス、1989 年 7 月 15 日）

個人誌

「新表現人（全 5 号）」（1977 年—1979 年）

「DANCE！（全 7 号）」（1986 年 1 月 6 日—1995 年 3 月 25 日）

「冬に花を探し、夏に雪を探せ。（全 11 号）」（2018 年 1 月 30 日—2019 年 9 月 30 日）

この略歴は、今年（2021 年）の 12 月 9 日に刊行された『ただ、詩のために —— 岡田幸文追悼文集』（ミッドナイト・プレス）から引いた。

岡田は 2019 年 12 月 9 日に永眠。遺稿詩集『そして君と歩いていく』が妻、山本かずこによって編まれ、その詩の質の高さと、長く現代詩を牽引したことが顕彰され第 58 回藤村記念歷程賞を受賞した。

本稿の読者のなかにはご存知の方もいるかもしれないが、私はこの岡田幸文の元で副編集長として約

8年ほどその仕事を手伝っていた。そして今年、追悼文集の編集を終えたばかりである（『ただ、詩のために——岡田幸文追悼文集』の詳細→<https://www.midnightpress.org>）

この追悼文集には、本サイト主宰の平居謙さんが追悼文を寄せていて、岡田とのさまざまな思い出を綴り、「岡田さんに会いたい」と胸がつまる思いで締め括られている。私も一篇の追悼詩と追悼文を寄せた。去年に発行した midnight press WEB N.14 (PDF) で両者の初回原稿を読むことができる。

→<https://www.dropbox.com/s/m042elz4vbt8lph/mpweb2020No14.pdf?dl=0>

この『ただ、詩のために——岡田幸文追悼文集』は54名の詩人、ミュージシャン、歌人、評論家らが執筆し、帯文は谷川俊太郎による。曰く、

ひとりの死は沢山の親しい生によって生き直される。

漱石の言う非人情に生きる詩人たちの情が胸を打つ。

私はこの帯文を最初に目にしたとき、しばらく考え込んだ。特に「漱石の言う非人情」である。この「非人情」とは、漱石の小説『草枕』（明治39〈1906〉年）で、漱石が「詩とは何か」を追及した造語である。ネットの簡便な解説では、「世間一般の義理・人情を超越して、それにわずらわされないこと。また、そのさま。夏目漱石が説いたもの。超俗。」（コトバンク）などと書かれているものが多い。内田樹はブログで「漱石の非人情は言い換えれば、「美的生活」と言うことだが、そのときの「美的」ということを「浮世の勸工場」¹の物差しで計っては俗になる。「美的」というのは、ここでは「超然」ということである。」（「非人情三人男 http://blog.tatsuru.com/2006/04/25_1155.html）と述べている。確かに『草枕』で語られる「非人情」はそうした側面もあるが、漱石はこの言葉を〈詩〉とセットで述べていて、一般的な「超俗」「超然」「美的生活」に言い換えしてしまうと、どうも趣旨が変わってきて

¹ 漱石が同書で述べている同時代の小説群や西洋詩の俗性についての言葉に出てくる。「いくら傑作でも人情を離れた芝居はない、理非を絶した小説は少かろう。どこまでも世間を出ることが出来ぬのが彼らの特色である。ことに西洋の詩になると、人事が根本になるからいわゆる詩歌の純粹なるものもこの境を解脱する事を知らぬ。どこまでも同情だとか、愛だとか、正義だとか、自由だとか、浮世の勸工場^{うきよ かんこうば}にあるものだけで用を弁じている。」

しまう²。むしろ「超越」と述べる方が近いかもしれないが、それはそれでまた神学的なニュアンスが付き纏ってしまいピッタリとは当てはまらない。漱石があえて「非人情」という語を作り出した理由があるはずである。

本論で漱石『草枕』を語りだすときりがないから、私なりに短めに述べると、この「非人情」は、漱石と同時代を生きた北村透谷が詩的原郷として幻視した「他界」や、折口信夫の民俗学で見出された古代神話へと通じる「他界」に近い言葉であると思う。そしてその「他界」とは、いわば私たち近代人が見失った、古代から人類が畏怖しつづけた魂が帰る場所、いわば「死」の先の形而上的世界と言える。『草枕』で漱石はそれを、近代化を免れた大自然の中に見出す。『草枕』1章中にはこのようにある。

「たちまち足の下で雲雀^{ひばり}の声がし出した。谷^{みおろ}を見下したが、どこで鳴いてるか影も形も見えぬ。ただ声だけが明らかに聞える。せつせと忙しく^{せわ}、絶間なく鳴いている。方幾里^{ほういくり}の空気が一面に蚤^{のみ}に刺されていたたまれないような気がする。あの鳥の鳴く音^ねには瞬時の余裕もない。のどかな春の日を鳴き尽くし、鳴きあかし、また鳴き暮らさなければ気が済まん見える。その上どこまでも登っていく、いつまでも登って行く。雲雀はきっと雲の中で死ぬに相違ない。登り詰めた揚句^{あげく}は、流れて雲^いに入って、漂^{ただよ}うているうちに形は消えてなくなって、ただ声だけが空^{うち}の裡に残るのかも知れない。」

漱石はこのように雲雀が雲のなかで死ぬことを幻視する。そして雲雀の「声」つまり「死者の声」だけが残り続ける雲上の世界を「非人情」と述べる。これを形而上的世界と呼ばずして何と呼べばよいか。

「雲雀の鳴くのは口で鳴くのではない、魂全体が鳴くのだ。」

このように述べながらも、漱石の明晰な頭脳は、「非人情」への憧れをそう簡単には永続させない。なぜなら詩人は雲雀ではなく、やはり人間であるからだ。シェリーの雲雀の詩を引いた後にこう述べる。

² 西洋詩の俗性を述べたが、漱石は「東洋の詩歌はそこを解脱^{しいか}したのである。」と幾つかの漢詩を挙げ、「超然^{しゅっせけんてき}と出世間的に利害損得の汗を流し去った心持ちになれる。」と述べているので、内田の言い換えもあながち間違いとは言えない。

「なるほどいくら詩人が幸福でも、あの雲雀のように思い切って、一心不乱に、前後を忘却して、わが喜びを歌う訳には行くまい。西洋の詩は無論の事、支那の詩にも、よく万斛の愁などと云う字がある。詩人だから万斛で素人なら一合で済むかも知れぬ。して見ると詩人は常の人よりも苦勞性で、凡骨の倍以上に神経が鋭敏なのかも知れん。超俗の喜びもあろうが、無量の悲も多かろう。そんならば詩人になるのも考え物だ。」

このように東洋の詩歌が俗を解脱したと言ったり、やはりそうではないと言ったり、『草枕』はここからさらにぐるぐると「詩とは何か」、「魂とは何か」を哲学的に追求してゆき、漱石作品中もっとも難解な小説とされる。しかし漱石が近代日本文学の最高位にあるのは、私たちがいまも乗り越えることができないこの最も難解な命題に全身で追求したからである。つまりその命題とは、近代における「詩の不可能性」の問題である。特に日露戦争を背景に書かれた『草枕』は、国家の名の下に大量殺戮の戦場へ国民の動員を繰り返す人間界（人情界）の現実への漱石の厳しい視線に貫かれている。そしてその視線は、あの有名なアドルノの言葉「アウシュヴィッツ以降、詩を書くことは野蛮である。」を通過し、二十一世紀の戦争を繰り返す「国家」の内部で生きる私たちすべての詩人を貫いていると言ってもいいだろう。

つまり、谷川俊太郎の帯文、「ひとりの死は沢山の親しい生によって生き直される。／漱石のいう非人情に生きる詩人たちの情が胸を打つ」とは、岡田幸文が漱石以来の大命題である「詩の不可能性」を全身で背負って生き、最後まで「魂の声」＝「詩」をもとめ、現代詩の沃野を耕しつづけた編集者であったことを言い当てたものなのである。私はその「沢山の親しい生」の末端のひとりに過ぎないが、果たしてこの岡田が背負った漱石以来の大命題を「生き直す」ことができるか心許ない。ただ谷川俊太郎という当代随一の詩人から託された課題のようにも思え、今改めて帯文を見つめ身が引き締まる思いでいる。

そうしたことを踏まえ、岡田の詩「ジプシーバスに乗って一度こんな詩を書きたかった」に戻ろう。ページを戻して再度読んでいただきたい。ここにも漱石のいう「非人情」への憧れが漲っている。「ジプシーバス」は、私の世代ではあのトトロの猫バスを想起してしまうが、あのアニメでは普通の人には

見ることができない、動物だけが乗れるバスであったから、ジブシーバスも雲雀の声を持つ詩人だけが乗れる同じ類のバスだ。

このバスに乗って、岡田は「遠くへ」向かう。「非人情」へ向かう。特に目を引くフレーズは、「ちょっと話をしただけで／その人がたとえば天皇制を支持しているなってことがわかってしまうときもあるんだ／それは直感ってやつだけ／直感をバカにしてはいけない／そして僕は天皇主義者とはつきあいたくない」である。この詩がいつ書かれたかは分からないが、「平成」元年にこのような詩行が含まれた詩集を編んだことは、岡田の思想のある重要な側面を示している。そして岡田は同年に「詩の新聞 midnight press」を発行、前年に「詩学」編集長を辞めて新たに設立した詩の出版社ミッドナイト・プレスを本格的に起動させ、やがて「平成」の現代詩に大革命を起こしていくことになる。

その詳細については、もう字数も足りなくなったので、『ただ、詩のために——岡田幸文追悼文集』の54名の追悼文をぜひ手に取ってほしい。そこに岡田幸文が残した「平成」の足跡が浮き彫りにされている。

最後に述べたいのは、「平成」時代が冷たい「崩壊」への過程の時代であったならば、岡田の仕事は、その「冷たさ」とは真逆の、きわめてあたたかな誌面づくりをしていたということである。他のほとんどの詩の出版社が時代の「冷たさ」そのものを表出し、「詩の不可能性」の道を知識の杖で巧みに渡っていったのに対し、岡田は、漱石の「雲雀の声」をもとめる情熱を絶やすことなく、ジブシーバスに乗って「平成」を駆け抜けたと言える。それはあたかも「崩壊」への抗いのように、自身が運転手となって詩人たちをジブシーバスに乗せて「遠く」へ駆けていったようにも思える。もちろんそれは「情」を持った詩人にしか見えないジブシーバスである。「平成」に青春を送り、未来に希望が持たずに大人になった私のような「ロスト・ジェネレーション」世代にとって、岡田が運転するジブシーバスに乗ることは一縷の希望であった。そのバスには、ジャニス・ジョプリンの曲だけでなく、ビートルズも多く流れ、賑やかなロック酒場のようでもあった。またベートーヴェンやブラームスなども流れていたり、ときには荒井由美や佐野元春なども流れていた。それはけっして「昭和」へのノスタルジーではなく、元号に象徴される「天皇制」などを吹き飛ばして、「昭和」「平成」を横串に、崩壊する世界を駆け抜けてゆく幻のバスであった。

だから、いま「平成詩」を語るならば、私たちは、ジノビエフが風刺したクレムリン宮殿の前の「無名酔いどれの墓」だけではなく、「岡田幸文」という墓碑銘が新宿の夜空に刻まれていることを忘れて

はならない。この原稿を書いている最中、大阪で悲惨なビル放火事件が起きた。世界は確実に崩壊の一途を辿っている。この冷え込む「令和」時代、私はジブシーバスに乗りたい。しかし新宿二丁目の深夜のバス停で待っていても岡田が運転するバスはもう来ない。

そうだ、これからバスの運転席に座るのは、私だ。そして、あなたたち一人ひとりなのだ。